

雨月

3 月 号



紅梅白梅

大橋 暁

この街に紅梅の香を見つけたり
水仙の句座に流れる香りかな
今年にも遅れがちなる寒の入
浅春や飛行機雲の尾を長く
下萌や大川縁にそこかしこ
白梅の先んじて咲き紅遅れ

句会場に大根漬けの句ひはも
公園の紅梅白梅相和して
牛ヶ首池つがひの鴨の離れざる
浅春の公園に人集まれり
公園の枯葉清掃実直に
早春の食堂新築賑々し
裏庭に出でし日もあり露の臺
余寒なほ大川縁の静けさよ
春菊や見てよし食しなほ良けれ
春雨のさて来るらしき気配あり

嫁ぎし娘来て雛飾り手傳へる 櫻坡子

昭和四十五年の作。長姉敦子、結婚した竹腰朋子、佐藤淑子が呼び出されて、雛飾りを手伝った。他にも近所の俳句関係の人達が喜んで手伝いに来られ、会社から帰宅すると「あら出来上がり」との記憶が蘇る。

(大橋 暁)



住み変り住み変り雛古びけり こと枝

転居を重ねられて来られた時の流れ、殊に慌しかった戦中戦後の時期を、雛に託して回顧されている。この時期、櫻坡子先生には、名古屋に単身赴任されており、駈上町に居(雨月山房)が定まるまでの一時期、私の実家(平安荘)に宿泊して居られた。昭和二十六年、山房に参上した時には、ご一家が揃っておられご安堵の様子であった。併しその後、最終的に大阪に移られたので、その際のご感懐かとも思う。

(浅井 青二)

雨月集

宝塚 片山喜久子

暁 選

白き息整へてより病室に
枯菊焚き天上の母よろこばす
講談を聞きて漱石忌を修す
何の鳥か枯木枯木を移りけり
冬菊や両家の墓を守りて老い
千両の荷のトラックが城に入る
人頼みのうしろめたさに年暮るる

八尾 密門 令子

西脇 笹倉さえみ

修復のなりし東塔初御空
峰寺に令和二年の初日受く
峰寺へ四方より寄する初茜
宸翰に瑠璃の艶増す竜の玉
主にはユダひひらぎに棘聖夜なり
師走はやメモに追ひ掛けられをりぬ
枯菊焚き横たふる儘灰残る

ゆくりなく秘仏にまみえ冬日和
冬うらら古都の五山を巡りけり
あなどりてならぬ齢の寒さかな
つくばひや昨日に続き百舌鳥の来て
すぐ前に山置くくらし日短か
作務僧の勢揃ひして大根干す
一本の針を捜せる夜なべかな

大和 落合絹代

木目美し木曾路の椀の根深汁
商店街の隠居揃ひて日向ぼこ
冬ぬくし二階建てバスはとバス来
うづくまる裸婦像石路の花あかり
宙吊りにはじまる歌舞伎十二月
谷戸深く今絵巻なる冬紅葉
持ち寄りてふるさと自慢かぶらずし

池田 丸尾和子

あかねさすと令和はじめの新暦
望のひかり降れる御代なれ勅題菓子
石庭と対峙小春の日を賜り
句ともがらと鱸酒くみて饒舌に
ふぐ刺に透けて皿絵の海のいろ
白波の囁む切り岸の水仙花
風邪の神一夜に声を奪ひ去る

大阪 山田天

寒鴉吾の柏手に応へけり
眼の眩むほどの鰹木淑氣満つ
大鳥居潜れば大気冷えまさる
吉兆の宝船やら小槌やら
色褪せし東華菜館時雨れけり
冬あたたか宮川町の石畳
犬矢来古りし花街の冬の朝

名古屋 手島伸子

高階の家より冬の夕焼濃し
走り根の露はなるなり冬木立
東北の林檎二種類皮をむく
敷きつめしままの落葉の日数かな
寒林に径あり人の影ゆらぐ
裏庭の片隅ひそと花八手
朴落葉裏むきのまま朽ちんとし

堺 西村操

正論の空し湯豆腐煮え滾る
虎落笛吾を呼ぶ声の確とせし
革コートのポケット女にも拳
湯ざめして寓居の家鳴り聞いてゐる
眠る汝のまなぶた動く霜夜かな
着ぶくれて踏み台の足よろめける
冬帝へ一歩出し得ぬ齢かな

名古屋 高木典子

丸々と帯木紅葉燠秘むる
一万歩冬日に誘ひ出だされて
太極拳の冬日掌に受け小半時
座布団を干して冬日を裏返す
畳目の逃げ足早き冬日かな
何事も日にち葉や枇杷の花
講義中静かに眠る枇杷の花

箕面 足立典子

御題菓子その色夜明け告ぐるごと
石棺の山を仰ぎて鋏始
入れ替はり次の鳥来る実万両
日向ぼこおぼろおぼろの母の声
山門不幸寒禽一羽又一羽
青空を渡る朝月寒念仏
日脚伸ぶ未だ日のある鬼門かな

近江八幡 中原敏雄

時雨虹友の訃のまた人伝に
厨より音のまたして年詰まる
初日記まつあれこれと食へしもの
雑踏を避けて末社に初詣
話また昔に戻り老の春
思ひ出せぬ初夢のこと話題とし
教へ子の孫抱く賀状また増えて

野牡丹集

暁選

名古屋 服部 珠子

冬 鴟の高音 一声 朝 厨
夕 映に美しくとも見ゆ 枯尾花
足 早に帰途急ぐ娘や年の暮
眼 裏に母の姿や年用意
日 向ぼこ無念無想の昼下り

大阪 本 田 正 子

織 田作の巨石の墓や照紅葉
行 きずりの宮の紅葉に小休止
極 月の坊の出入りの夥し
落 日の影須臾に消え鳥浮寝
夕 仕度先づは白菜ざくと切り

横 浜 堀 田 こ う

老ゆるまじそと腕なで小春の緑
池の面に色をゆらして銀杏散る
枝先にたたる石榴に日の重し
池の端の朽舟に月澄みまさり
琵琶の音の胸にしみ入る月今宵

大阪 金 森 信 子

天帝の遊び心か風花す
冠雪富士大きく坐してをりにけり
迎春の花とし床の草さんご
七種粥仏と我の米を磨く
一堂に師と句輩投扇興

川 西 宮 平 静 子

深山の日を大きく掬ひ朴落葉
存へて酌む鱈酒に頬を染め
落葉踏む音に従ふ心はも
投句箱と子規の句碑あり寺小春
工房の木屑に溜る冬日かな

勾玉集

暁選

＊ 子 宮 原 悦 子

汐入の池泉に鴨の来りけり
鵠来る少彦名の神の海
餌場の田目指し鵠の飛び翔ちぬ
鴨万羽少彦名の裾曲かな
ライターの火付きのわろし寒波急

神 戸 熊 岡 俊 子

断層の記憶に凍つる明石の門
空蒼く桜冬芽の濠をゆく
寒林やバルビゾン派に親しみて
孤高とは凜と一輪寒薔薇
早梅の香や寿福寺を訪ねたく

高 槻

尾 崎 み つ 子

雲の影濃く置き山の枯深む
侘助や三斎ガラシャ眠る寺
底力秘めて真紅の冬薔薇
山茶花は散る花雨の石だたみ
民宿の主はまたぎ牡丹鍋

愛 西

小 木 曾 文 明

メタセコイア天突く大樹紅葉して
成り年と云うて婿殿柿吊す
山盛のなかなか減らぬ柿を剥く
息災を謝して不漁の秋刀魚焼く
忘年会女城主てふ地酒酌み

知 立

岡 田 ち た 子

ひともしを刻む香高き朝厨
ねまるほか術なき恙虎落笛
熱爛や自慢話に尾鱈つく
寒禽の声降りかぶる寺無住
神統ぶる伊勢は対岸冬霞



雑

几帳面な書架の挿絵や漱石墨着ぶくれて電車一本見送りぬ頭上より紙の星降る聖夜劇気負はずに掌サイズ日記買ふ達磨絵に目を入れ果つる古曆A Iの議論百出おでん酒空つ風くぐり草津の湯畑に腹背に懐炬を風の上州路万両の千両ほどを剪り供華に電動の自転車を借り冬紅葉街師走こけらおとしのスタジアムへ江戸前の齒切れのよさも年の市あきつしま令和穏しき明の春読始子規晩年の歳旦帳寒卵平飼鶏の滋味あふる伐採さる桜や冬芽あまたつけポネットに月光にじむ時雨あと丸四角三角かさねおでん鍋

浦安 福岡かがり
東京 岡村 彩里
同 川村 欽子
同 辻 由紀

詠

風呂吹の透き徹りゆく白さかな
ポインセチア火の海のごと花卉市場
親指を立てて下校子石路の花
一天を一碧にして空つ風
奇遇これ子に会ふ暮の有楽町
日短か広げて閉づる山の地図
膝を抱く黒き裸婦像冬桜
日に風にほのかに匂ふ柊咲く
落葉掃く短くなりし竹箒
背を丸く冬日を負うてシルバーカー
十二月心ばかりが先走る
一人飲む珈琲苦き今朝の冷え
ドローン飛ぶ馬場五万人冬うらら
牛蒡注連の大きを買ひし女かな
遭難の霊を鎮めて富士落葉
賑やかにジルバを踊る聖夜かな
千両を載せて花屋のワゴンかな

横浜 下田 奉枝
御殿場 米山寿々代
同 上村士守江

暁選

作品鑑賞

十一月号

三輪 温子 金森 教子
阪上 多恵子 足立 典子
塩見 治郎 村上 美智子
大橋 暁

光圀の教への美田稲の秋 大島寛治

明君と言われた光圀公。其の仁政の手始めは城下に水路を敷設し、百姓の年貢等、農政に心を砕かれた。豊かに実る黄金色の穂並を見乍らふと遠き世の光圀の訓に思いを馳せられた作者。改良を重ねて来た稲作の美田に感慨深いものが読み取れる。(温子)

光圀公即ち水戸黄門は農作を奨励し早魃を嘆いた。光圀の教への稲はよく稔ったという。(暁)

算盤を使はず捨てず涼新た 大石よし子

今や世の中はハイテクの時代、算盤をパチパチ弾いたのは一昔前の事。しかし算盤塾は残り、又どの家にも探せば算盤の一つや二つある。「使はず捨てず」と的確に表現され、夏とは違う一抹の寂しさを持つ。「涼新た」の季語に作者の気持を込められた。(教子)

昔のように算盤塾なるものは見かけなくなったが、日本の一部にはまだ生きています。(暁)

盆僧の袂へしまふサンングラス 笹倉ささみ

僧と雖も生身の身体、炎暑の強い日射にサンングラスを掛けて見えたのだ。着くとさつと外して、それを袂に仕舞われた。その一瞬の動作を作者は目ざとく捉えられ、「袂へしまふサンングラス」と詠出し、臨場感溢れる佳句を成された。(多恵子)

盆は秋といえども陰暦七月、日射はきつい。袂に入れられる盆僧といえどもサンングラスは必需品で、軽妙に捉えられた。(暁)

地図に無き滝とて心逸りたる 隅田 恵子

全国にごまんとある滝、昔より滝は神と崇められ信仰対象でもあった。人間の力を超越した大自然の営み、それゆえ人らは滝に心注がれる。地図に載っていないような秘境の滝とあらば作者のみにあらず心逸る。「地図に無き」の表現が卓逸。(典子)

滝を目前に眺めると、誰しも神秘的な美しさと敬虔な心が生まれる。滝の落ちる音に暫し接し、自然の偉大さに驚く。(暁)

生国魂の杜を焦して夜店の灯 本多 正子

作者は夜店の灯が杜を焦してと詠んでいるので、大阪三大夏祭のいくたま夏祭と推察する。夜店は曾ては盛んで、人々も楽しんで夏の風物詩であったが次第に姿を消している。生国魂社は神武に遡り、境内には多くの末社や西鶴像が在る。(治郎)

生国魂神社は大阪の夏祭として有名。生国魂さんの裏手には夕霧太夫の墓、又西鶴像等が名物。多くの浪速っ子が集まる。(暁)